

あとがき

子供の頃から、何度となく私の故郷の祖先は、大阪の陣に鉄砲組として出陣したと云う話を聞かされてきた。この祖先と云うのは、私の故郷の草分け百姓のことである。高校を終ると、好むと好まざるとに関わらず故郷を後にし、以後、年と共に、故郷は遠くに有ると思うものとなった。

私が、故郷（長野県小海町）の歴史について、再び、興味を持ちだしたのは、平成六年二月十日の事である。この日の朝刊に、「国宝級 聖徳太子の剣に匹敵」の大見出しで、私の故郷に仏像や、梵字などを刻印した白鵬時代の刀剣が見つかったと云うのである。

凡そ、草深き里に、文化財と名の付く様な物はないものと思っていたが、地域文化財をはるかに超えて、国宝級と云うから驚いた。早速、微かな記憶と、想像も加えて一文を物にし、平成十七年に拙著「ふるさと史物語『三寅剣の謎』」を出版したのである。

この出版に際し、昭和五十六年に、当時の立正大学北原進教授が、私の故郷に残された夥しい古文書について調べられた「近世農村文書の読み方・調べ方」と云う本を見る機会を得た。私の故郷には、昔から沢山の古文書が残されていると云う事は聞いていたが、この本をきっかけに、私の古文書漁りが始まった。その後、現在住む西宮市にも「古文書を読む会（主催：飯塚修三氏）」がある事を知り、すぐに参加させて頂き、私のとって力強い

後ろ盾となった。

私の故郷、信州佐久地方とは、信州四つの平の内の一つで、千曲川上流に開けた佐久平である。この佐久平には、千曲川に沿って、日本一高い所を走るJR小海線が走っているが、この中に、山国信州とは思えない、小海・海尻・海の口と云う駅が連なっている。

今から、千百年以上前の、仁和四年（888）、先の「東日本大震災」に匹敵する「五畿七道」を揺るがす大地震が発生し、八ヶ岳の一つ、天狗岳の山半分がなくなるほどの大崩落により、天然の堰止め湖の堰堤が破壊され、千曲川沿いの六郡を押し流した、と平安時代の歴史書「日本三代実録」等、いくつかの書物に書かれている。往古、信州には多くの湖沼があったが、これ等の多くは、山崩れなどに依って、川が堰き止められてできた湖や池で有ったのだろう。

そうした、湖の中で、「鑑掛の戸」と云う自然の堰堤によって堰き止められた湖があり、

この「鑑掛の戸」とは、佐久地方史の原典とされる、元文年間に編纂された「四鄰譚藪」

しりんとんそう

に、「貝掛の戸（本文参照）」と書かれているが、これは、著者が伝承として聞いた話を、文章にする際に、「鑑掛」を「貝掛」と誤って書き残したからである。この「鑑掛」という耳慣れない名前が、私の故郷である。小さい時から、変わった名前だとは思っていたが、「鑑掛の戸」とは、千曲川の水を鍵をかけて堰きとめていたことから生まれた言葉だったのだろう。ただ、仁和の大崩落以後も、佐久平は、度重なる千曲川氾濫に加え、戦乱に明

け暮れ、凡そ人が住める環境ではなかった。

私の故郷が、歴史上に登場したのは、秀吉によって天下が平定され、小諸五万石の領主に任ぜられた仙石権兵衛秀久（以降権兵衛、後の出石藩主）の支配になってからである。

権兵衛が小諸領五万石に封ぜられた時、権兵衛は、陣借り武者として小田原征伐に参戦した結果、並いる武將を押しつけて城持ち大名に封ぜられたもので、他の大名の様に、領主としての基盤はかなり貧弱であつたろうと推定される。従つて、国入りすると、領内の郷士を呼び集め、それまでの陣城の破棄と、道路の整備、そして新田開発を命じている。従つて、私が子供のころ聞かされた、「大坂の陣へ出陣」の話は、単なる風聞や、作り話は無かつたかもしれない。

権兵衛は、その後、秀吉が進めた朝鮮征伐にも参戦しているが、この時は、朝鮮まで出兵はしていないが、戦後五千石の加増になっている。おそらく、朝鮮征伐に先立つて行われた名護屋城の築城に関わつたのではなからうか。名護屋城の築城は、加藤清正の普請奉行のもとに行われたと云われているが、この普請が余りに苛酷であつたために、多くの人足が亡くなつたと、当時来ていた宣教師が書き送っていると云うことで、築城と云うのはそれほど苛酷のものだったのだろう。

我が祖先たちが、新田開発を命じられたのは慶長十五年（1610）で、この事は残されてゐる古文書に書かれているので、間違ひはあるまい。この時、我が祖先が新田開発を命ぜられたのは千曲川上流の福山河原であつた。この福山河原とは、かつて千曲川を「鑑

掛の戸」によつて堰き止めていた地籍「下の深山（現下の宮）」直下で、かつては、千曲川の川床であつた「福山河原」という、左岸の段丘である。当時の「福山河原」は大石、小石が累々と並ぶ荒地で有つた。

もともと権兵衛は、戦国の時世に於いても武辺者であつたとは思えない。権兵衛は、秀吉の「黄母衣衆」の一人であり、この「黄母衣衆」は側近では有るが、云わば伝令役である。その中で、権兵衛は、戦を行うにあつて必要な、陣を築いたり、橋や石垣を築く土木工事得意としていたのではあるまいか。それを裏付けるものが、朝鮮征伐の際の加増である。権兵衛は、これ等の土木工事で、自然石をそのまま積み上げる、野面積みに長けていて、小諸城を始めとする今に残る権兵衛の築いたいくつかの城は、何れも野面積みである。その点、加藤清正は穴太衆と云う切り石を用いることを得意とした石工衆を従えていた。

天下平定後、権兵衛は、これ等石工衆を新田開発に当らせたのではなからうかと考えている。慶長十五年、私の故郷は、権兵衛から「福山河原」に新田開発を命ぜられたが、慶安三年（1654）に「開発取り掛かり候得共、堰普請物入りも多く、捗り申さず候」と書かれていて、三十年間も中断（退転）している。その結果、「向う三年年貢、諸役免除」となり、同時に「他郡よりの百姓召し返し」と書き遺されていて、この「他郡よりの百姓」と云うのが、権兵衛支配下の石工衆ではなかつたかと推測している。

その背景として、私の故郷は自普請となっていて、村人独自に開墾すると云うことで、領主側が新田開発の工夫を手配すると云うのは考えられず、更に、工夫の処遇まで領主側が口を挟むのも理解しがたい。即ち、領主側の命令のもとに使われていた工夫、即ち石工衆ではないかと思っている。

福山田圃は、緩やかな傾斜に沿った棚田だが、現在に残る福山田圃は殆ど升型に区切られていて、四囲を巡る石垣は野面積みであり、ほぼ垂直に積まれていて不慣れな百姓が積んだものとは思えない。中でも、角石や、土台石等はあたかも総郭の城壁を思わせる積方であり、村中あちこちに有る石垣は、悪餓鬼どもの格好の遊び場であったが、崩れたり、壊れたりすることに氣を使った記憶はない。

ただ、この権兵衛に対する佐久地方の人たちの評価は極めて悪い。一般市民が、総てそうであったか分らないが、権兵衛に対する評価は、「四鄰譚藪」を読んだ郷土史家や、知識層から広がったと推測している。(中略)

古文書というのは、百姓の書き残した物には嘘偽りはないが、地方学者や、郷土史家の書いたものには嘘はないとしても、表現方法が偏っていたり、誇張して書かれたものは、後世、それを読んだ人は偏った解釈をしたのではなからうか。

あきが
私の祖先たちは、「弘化元年（1844）より、増し高となり八十四石三斗五合の取り米

御割付により、明治元年まで上納」と書き遺されている。この取り米とは、年貢のことで、当時の平均的な免（年貢率）は三つ半（三十五％）程度であったので、総出来高は二百四十石となる。これは、上田で、ほぼ二十町歩という事になる。我が祖先たちは、慶長十五年以來、僅かに二十町歩の新田開発に二百三十五年程の歳月をかけて漸く完成しているが、その間に、度々繰り返される自然災害や、浅間山大噴火による近世最悪の天明飢饉など、多くの困難に遭遇している。

福山田圃は、今迄に二回大きな変遷に遭遇した。その一つは、昭和十年、千曲川に沿って走る小海線が開通し、千曲川沿いの田圃が大きく削られた。それでも、小海線を跨いで、水道橋で水を送っていた。近年に入り、国道141号線の拡幅工事により、道路の両側は大きく削られ、やがて、道路に沿って両側には商業施設が軒を連ねて建ち並んだ。

最近になって、何年振りかで福山田圃を歩いてみたが、かつて、小海線を挟んでいくつかの田圃があったが、今ではすべて自然の姿に戻り、かつての水道橋も取り外されていた。福山田圃で、最も早く開発された限高の一番奥に我が家の田圃があり、休耕政策が取りざたされた折、今は亡き兄から休耕田にしたと云う事は聞いていた。今度そこまで行つて見ると、田圃の真中に直径が一尺もある木が何本も生えていた。

最近になって、限りなく限界集落への道を進む私の故郷について、せめて、先祖達への
あとがき

供養の言葉として書き上げたのが、私にとって初めての時代小説「山鳴り」である。

時代背景は天明期を中心とし、極力、古文書や文献に書かれた内容に沿い、地名は場所までは特定しないが、私が子供の頃の記憶に有るものとした。ただ、当然の事ながら、物語や登場人物は総てフィクションである。但し、「弥兵衛事件」だけは、実際に有ったことである。実際には、桜田御領と呼ばれた慶安四年（1651）頃の出来事であり、時代を百四十年繰り下げている。事の真相は定かではないが、支配者が目まぐるしく変わる中で、の混乱に乗じた開発権取得にまつわる事件ではなかったかと推測している。（以下略）

著者